

十七歳のリチウム

英語英文学科4年 神保 直矢

「おい。おい」

それが私を呼んでいるのだと気づくのに数秒かかった。まさか自分が話しかけられるなんて思いもしていなかったので、ずっと窓の外に広がる青い空ばかり見ていた。都合のいいことに私の席は窓側だ。だから例えば加藤美香子と名指して呼ばれたとしても、この居心地の悪い時間をやり過ごすためにボーッとしていた私は、すぐには反応できなかつたに違いない。

「チッ」

私がなかなか返事をしないからか、前の席の男子はあからさまに舌打ちして、数枚の紙を私の机に落とした。置いたのではなく、落とした。バサバサ。彼が私に何を求めているのかわからないまま、とりあえずその紙をきれいに整える。あまり散らばらなかつたのは幸いだった。それは学年便りと書かれたプリントで、夏休み明けにある文化祭の日程やキャッチコピーが載っていた。今年は「記録より記憶に残る文化祭」と

いうコピーだった。ああ、配布物か。私は一枚取って、残りを後ろの女子に渡そうとした。彼女は私の手に直接触れたくないみたいで、まるで汚いものでも扱うかのように、端っこを摘んだ。私は気にしていない振り。

どうやら私はいじめられているらしい。高校二年生にもなっていじめなんて、正直、幼稚すぎると思うけど、そういうものは年齢とは関係ないのかもしれない。大人になってもいじめる人はいじめられ、いじめられる人はいじめられる。何かの本で読んだことがある。人間は他人を貶めて安心を得る。つまり共通の敵が必要。同目的を攻撃すれば、攻める側には連帯感が生まれる。仲間を作るためにまず敵を作るといいうわけ。

だから、多くの場合、いじめに大した理由はない。というより、なんだっていじめの理由になりえる。見た目が気に喰わないとか、喋り方が気持ち悪いとか。どこか目立つところがあれ

ば、そしてそれが個性ではなく汚点だと捉えられれば。

では、私の場合はどうだろう。なぜ私はいじめられているのだろう。はつきり言って身に覚えがない。あつたらとくに直している。別に自分が完璧だと思っているわけじゃない。欠点を探せばいくらでもある。だけど、高校に入学して一年と三カ月、これまでは普通にやれていた。友達もそれなりにいた。なのに、最近になつて、突然。

突然、みんなが私を避け始めた。

友達だと思っていたみんな。仲のよかつたみんな。いつも一緒にいたみんな。私が話しかけても、顔を歪めて曖昧な返事を返すだけ。あとは無視。無視。無視。私がまるで存在してないみたいに見える舞う。今のところ、物理的な危害を加えられることはないけれど、それも時間の問題。

私の何が気に障つたのだろう。外見や性格が問題なら、もっと早くにいじめは始まっていたはず。もしくは、少しずつ距離を置いていたか。どっちにしても、友人たちが一斉に私を遠ざけるなんて事態にはならない。きっと何かきっかけがあつたんだ。不用意な発言で誰かを傷つけた？ それとも、知らない間に誰かの大切なも

のを壊した？

心当たりはまったくない。考えてもわからない。でも、現にいじめられているからには、私に原因があるんだ。だから私は、これ以上いじめがエスカレートしないように、できるだけ大人しくしていようと誓った。

今はホームルームの時間。文化祭でのクラスの出しものを決めている。クラスメイトが楽しそうにざわめく中、私は空を眺めていた。もちろん、そんなことをしているのは私ひとり。今日は雲の流れが遅い。昨日はもっと早かった。一昨日は曇りだった。このところ、空ばかり見ている。授業中なら他にすることもあるのだけれど、休み時間も同然のホームルームではそうもいかない。自習でもしようものなら、ガリ勉強なんだと難癖をつけられるに決まっている。とにかく、浮いてしまうような言動は一切控えないければならない。読書だろうと居眠りだろうと。

学校の帰り道。夜のベッド。ひとりできるときはたくさんあっても、寂しくはない。一番孤独を感じるのには、独りなんだと実感するのは、笑い声で溢れる空間で、私だけが笑っていないとき。一緒に楽しむこともできず、ただ黙って時間が過ぎるのを待っているとき。私は確かに

ここにいるのに、私の傍には誰もいない。とても辛い。

ふと黒板を見ると、白いチョークで焼きそば、たこ焼き、かき氷と書かれていた。いつの間にか屋台をやる方向で話が進んでいる。私は他にやりたいことがあったのだけれど、仕方がない。諦めよう。どうせ私の意見は通らないのだし、そもそも、私の言葉を聞いてくれる人はいない。いや、いるか、一応。人ではないけれど。

私が溜め息をつくとき、ソレは耳障りな声を発した。

『何盛り上がってんだ、こいつら。馬鹿じゃねえ？ 文化祭なんて目立ちたがり屋が調子に乗って終わりだろ。こういうイベントに本気になるやつなんか痛いだけだってわかんねえのか？』

ソレは私の机の上に、そこにいるのが当然だとしてもいうように立っていた。大きさは十センチメートルほど。人に近い形をしているけれど、どう見ても人間ではない。指や髪の毛などの細かい部分はなく、顔にはボーリングの玉のような三つの穴が開いている。黒い、黒い穴。まるで粘土のような質感をしていて、「ものけ姫」に出てきた木霊と瓜二つだ。違うところといえれば、体全体がクリーム色をしていることと、や

けに存在感があること。

「やめてよ、そういうこと言うの。みんな一生懸命やってるんだよ」

私は小声で注意した。少し腹を立てながら。『一生懸命だろうがなんだろうが、しょせんガキの遊びじゃねえか。一部のやつらが勝手に進めて、残りは無理やり手伝わされるんだよ。お前みたいな根暗はもう雑用タイプだ。どれだけ頑張っても日の目を見ない。表に出る少数だけが評価される。アホくせえ。だったら始めからやらないほうが賢いだろ』

「別に、目立ちたいからやるわけじゃないよ。もっと大事なこと、思い出のために……」

『思い出ねえ。つまりこういうことか？』

ソレは指のない手で、さつき配られたプリントを示した。

『記録より記憶に残る文化祭……。いかにも馬鹿が好きそうな言葉遊びだ。中途半端に捻つるところが馬鹿そのもの。考えた奴の器が知れるな。思い出が大事とか言ってるお前も同類の馬鹿だ』

殴りたい。そんな衝動を私は抑える。暴力に訴えても、コレにはなんの意味もないだろうか。

コレが私の前に現れたのは、いじめが始まっ

たのと同じころ。初めて見たときは驚いた。でもすぐに理解した。コレは私の妄想だと。

私の話を聞いてくれる人がいないものだから、自分で話し相手を作ってしまったんだ。その証拠に、コレは私以外には見えていない。こうして会話をしているのも誰も反応しない。つまり幻覚。

秘密のお友達、と言えは聞こえはいいけれど、そんなに素敵なものじゃない。なぜならコレは、いつもいつも、私を怒らせるようなことばかり言う。文句を並べ立てて、揚げ足を取って。偉そうに。いらいらする。

「いい加減何やるか決めようよ。今日中に決めなきゃいけないんだから」

そう言ったのは文化祭実行委員の男子。黒板の前に立って司会をしている。自分の役目を必死に果たそうとしている彼に対して、コレは悪態をついた。

『てめえの進行が下手だから伸びてるんだろ。早く終わらせたいならもっと効率よくやれ、ボケ』

そんなひどい言い方しなくてもいいじゃない。彼のせいじゃないよ。みんな積極的に意見を出し合っているけれど、それぞれが好き勝手言いすぎて、まとめるのが大変なんだ。彼は悪

くない。もちろん誰も悪くない。悪くない。

だけど、心のどこかで、早く終わってほしいと願っている私がいる。こういう自由な雰囲気は、私にとっては苦痛だから。

そう、忘れてはいけない。コレは私の妄想。ある意味、内面を映す鏡。私の汚い部分を象徴しているんだ。コレは私の本音を代弁しているに過ぎず、私が思っていないことはコレも言わない。

私イコール、コレ。自分がこんな醜い人間だったなんて。すごく嫌。

「他にやりたいものがある人はいないね。じゃあ、黒板に書いてある候補から選ぶってことで——」

司会が締めに入ろうとするのを、異様に元気な声が遮った。

「あー、はいはいはいー！」
私のいる位置から最も遠い、廊下側の後ろの席で手が挙がる。途端、教室が静かになった。それだけの影響力を彼女は持っている。

「はい、桐島さん」
司会が少し緊張した様子で彼女を指す。クラス中の注目が彼女に集まった。私は無関心を装って、意識を傾ける。

桐島美奈子。クラスのリーダー的存在。軽音

楽部所属。校則違反の明るい茶髪にだらしない着た制服がなんとも不良っぽいけれど、澁刺とした性格と整った顔立ちも相まって、人気はかなり高い。

「どうしても食べもの屋じゃなきゃ駄目なの？ なんかそういう流れになってるけど」

「いや、そんなことはないよ。でも、準備とか考えると、あんまり大がかりなものではない」「じゃあさ、もう一つ候補追加してもいい？」

確認する必要はない。彼女の提案なら受け入れられる。私と違って。

「まあ……いいけど。何？」

「映画。映画撮りたい」
映画？

『希望があるならさっさと言っときゃよかったじゃねえか。今ごろ遅ーんだよ。我がままにもほどがあるな。何様のつもりだよ』

そうやって難癖をつけたのはコレだけだった。

「映画か。いいね」

「面白そう」

「やろうよ」

「決まり決まり！」

「意義なーし」

予想通り、彼女の意見に賛成する人が大半を占め、散々迷っていた出しものはすんなり決定した。これまでの四十分超はなんのためにあったのだろう。

『どいつもこいつも簡単に流されやがって。逆らったら孤立するんじゃないやねえかって怖がってる臆病者だ。プライドのない有象無象が』

そのあとは撮る映画のジャンルや配役の話になり、まず監督がいなければ始まらないということになった。どこからともなく、桐島さんがいいと思う、と声が上がると、桐島美奈子はさも意外そうに、半笑いで首を傾げた。

「私？ え、やらないよ？」

彼女が断ると、急にどよめきが起こった。彼女が意外だったことが意外だったのだろう。それはそうだ。発案者は同時に責任者でもあるのだから。

『ハッ。これだよ。言い出しつべが嫌がつてりや世話ねえぜ。言うだけ言つて他人任せとはな。本当、何様のつもりだつーの』

誰もが桐島美奈子が監督をするのだと思っていたため、予期しないところでつまずいた話し合いは、それ以上先に進めなくなった。人望、リーダーシップ、センス諸々含めて、彼女の代役になりえる人材などいるはずもなく、司会が

焦って彼女を説得しようとする。

「桐島さんがやってくれなきゃ困るよ。君が映画を撮りたいって言ったんだから」

「撮るって、私が撮るんじゃないよ」

「じゃあ、誰が？」

「加藤さん」

桐島美奈子はためらうことなくそう言って、私を鋭い目つきで睨んだ。私は窓の外を見てポロロとしていたわけではなく、むしろその逆で、彼女の言葉を集中して聞いていたので、その名前が私の名前だとすぐに気づいた。しかしクラスのみん中は違うようで、一瞬の間があったあと、桐島美奈子に注がれていた視線が一斉に私に向けられた。おそらく彼らは訝しがっているのだろう。なぜ、私なのか、と。私は、桐島美奈子が映画を撮りたいと言ったときから、こうなる気がしていた。やはり彼女はあの約束を覚えていたのだ。だけど、私には彼女の意図がわからない。今となつてはあんな約束、無効なのに。

一年前、私と桐島美奈子は約束した。次の文化祭では、必ず映画を撮ろうと。

去年も彼女とは同じクラスで、なんだか嘘みたいな話だけれど、私たちは友達でもあったのだ。入学したてのころ、名前が似ていると言っ

て、彼女に声をかけられたのが、仲よくなったきっかけだった。それ以来、彼女を通じてたくさんの友達ができしたが、彼女以上の友達はいなかった。

彼女は私をミカちゃんと呼び、私は彼女をミナちゃんと呼んでいた。

やがて初めての文化祭が近づき、私はクラスで映画を撮りたいと提案した。単純に映画が好きだったことがその理由。けどあっさり却下され、多数決でお化け屋敷をやることになった。私はあまり悔しがることもなく、その結果を受け入れられたのに、なぜか桐島美奈子は私よりも不満そうだった。お化け屋敷なんてつまらない、ミカちゃんの映画が見たいと言ってくれた。私は嬉しくなつて、じゃあ来年は絶対に映画を撮るねと答えた。

ところが、いじめが始まって、私たちの友情は失われた。彼女は私をミカちゃんとは呼ばなくなり、私は彼女を呼ぶことすらなくなった。そんな相手との約束を律儀に守る必要はないはず。彼女の目的はなんなのだろう。

桐島美奈子はまだ私を睨んでいる。

「加藤、さん？ でも、それは……」

司会がうるたえる。言いたいことはわかるし、私の前では口にしにくいだろう。いじめられて

いる人間に監督が務まるわけがない、なんて。私もそう思う。

そのとき、授業終了を告げるチャイムが鳴った。司会は救われたとばかりに仕切り直し、細かい内容はまた今度話し合うとして、ほぼ強制的にホームルームを終わらせた。するとタイミングよく担任の先生が入って来て、そのまま帰りの会に移った。気まずい空気が解放され、ほっとして俯くと、三つの黒い穴が私を嘲けるように見ていた。

『わかつてるんだろ?』

「……何を?」

『あの女がお前を推薦した理由』

「わからないよ」

『嘘だ。本当はわかつてる』

「嘘じゃない」

わからないからわからないって言っているのに。

『なら教えてやる。お前を笑い者にするためだ。できあがったものを馬鹿にするか、お前に全部押しつけて楽をするか。とにかく、お前を陥れようとしてるんだよ』

なんでそんなこと……。

『本当はわかつてるんだろ?』

わからないよ。

『あの女が、お前をいじめようと言い出した張本人だつて』

やめて。聞きたくない。

『友達が一斉にお前を無視し始めたんだろ?』

一斉に、だ。そんなこと、ありえるか? あり

えないね。お前が何をしでかしたにしろ、バラ

つきはあるもんだ。圧倒的に影響力のある奴が

裏で糸を引かない限りはな』

やめて。

『そんな奴はあの女以外にはいない』

やめて。

『本当はわかつてるんだろ?』

やめて。

『俺がわかるんだ。お前もわかつてるはずだ』

その言葉を聞いて、私は悲しくなった。

そう、忘れてはいけない。コレは私の妄想。

ある意味、内面を映す鏡。私の汚い部分を象徴

しているんだ。コレは私の本音を代弁している

に過ぎず、私が思っていないことはコレも言わ

ない。

私イコール、コレ。

自分がこんな醜い人間だったなんて。すぐ

く嫌。

たとえ友情がなくなつたのであつても、かつ

ての親友を疑うなんて、最低だ。

『来たぜ』

顔を上げると、すぐそこに桐島美奈子がいた。

ギターケースを背負い、鞆を持っている。帰りの会

の会は終わっていた。

『どうするの? 映画』

彼女が強い口調で問う。私はまた下を向く。

「……私には無理だよ」

『やりたくないの?』

『どうしてやらせたいの?』

『だつて、ミカちゃんとの約束じゃん。忘れてた?』

た?』

彼女は私をミカちゃんと呼んだ。私たちが友

達だつたころのように。

『ミカちゃんが自分からやりたいって言つて言うと思

つたのに、全然そんな気配ないから、代わりに

私が言ったんだけど。忘れたならいい』

もしかして、それで睨んでいたのだろうか。

いつまで経つても私が動かないから。約束を忘

れていると思つたから。

『おい、妙な期待するんじゃないやねえぞ。どうせ裏

切られるんだ』

そうかもしれない。だけど、踵を返して立ち

去ろうとする彼女を、私は引き留めた。

『ちょっと待つて。——ミナちゃん』

私は彼女をミナちゃんと呼んだ。私たちが友

達であるかのように。

「何？」

「覚えている。約束、ちゃんと覚えているよ」

「じゃあ、なんで？」

「あのね、頭おかしいうちで思うかも知れないけど、聞いて。最近、変なものが見えるんだ。ソレは私の中のもう一人の私で、ミナちゃんのことを悪く言うの」

「悪く？」

「ミナちゃんが私をいじめてる張本人だって」

「ふうん。そんな風に思ってたんだ」

「……ごめん」

「ああ、違う違う。私が言ったのは、その、もう一人のミカちゃん？　ってやつのこと。そんな風に解釈してたんだね」

「……………」

解釈とはどういう意味だろう。私が戸惑っている時、ミナちゃんは唐突に質問してきた。

「ミカちゃんはもう一人のミカちゃんをどう思っているの？」

「どうって……」

「答えて」

「嫌だよ。すごく嫌」

「消えてほしい？」

私は頷く。消えてほしいけれど、何度もそう

願ったけれど、コレが私自身である以上、消えることはない。

「わかった」

そう呟いて、ミナちゃんはケースからギターを取り出し、細いところをバットみたいにして、思い切り振りかぶり、思い切り振りおろした。私の机の上には。

『マジかよ』

ガアン。

大きな音がして、ソレはギターに押し潰された。

「え？」

私はきょとんとして、ミナちゃんを見る。彼女はこやかに微笑んでいた。

「はあ、すっきりした」

「ミナちゃん、なんで——？」

「コレが原因だよ、みんながミカちゃんを避けてたのは。コレは幻覚でもなんでもなくて、私たちにも見えてる」

「そう、だったの？」

いじめが始まったのと、コレが現れたのは、どっちが先だった？　てっきりいじめのせいであんな幻覚を見るようになったのだと思いついてたけど、そうではなくて、コレが現れる前に避けられていると感じたのは、ただの勘違

い？

「だったら、そう言ってくれば」

「言えないよ。だってミカちゃん、コレと普通に喋ってるんだもん。こんな得体の知れないものとき。引くでしょ、そんなの。私にも相談してくれないし、触れないほうがいいのになって」

「もし、相談してたら？」

「もちろん助けたよ。友達だもん」

「……ありがとう」

「で、どうするの？　映画」

た。

「やる。やるよ。約束は守らなきゃ」

私が笑うと、ミナちゃんも嬉しそうに笑い、ギターをしまった。机の上のソレは見事にひしゃげていて、二度と動かなかった。